

初級Ⅲ 青年クリシュナ

テキストは理論→実践→神話／思想の順にならべてあります。

初級篇Ⅱにおいてシンプルな「ガット」を学び、初めて「ヌリティヤ」に触れました。

ここからはヌリティヤを含むレパートリーが増えてきます。

そこで理論篇では出来事や感情を表現するための「アビナヤ」という概念を学びます。

またカタックの流派について一瞥します。

実践篇では、まづタタカールの変則をひとつ、次いでⅡに続いてヌリッタの「シリーズもの」をひとつ学びます。

そして、ヌリティヤの代表的演目である「カヴィッタ」をふたつ学びます。クリシュナを主題にした実にチャームングで素敵な作品です。

最後にグル「師」への感謝の気持ちを示す「ヴァンダナ（祈禱）」である「グル・ヴァンダナ」を学び、完了となります。

神話／思想篇では、実践篇で学ぶカヴィッタに関わる「クリシュナがゴーヴァルダナ山を持ち上げるはなし」、

そして「グル・ヴァンダナ」に登場する最高神たち、ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァについての基礎知識を学びます。

これで初級篇が修了となります。ここまでたどり着けたことを誇りに思ってください。

ヌリッタ（抽象舞踊）のもつかたちの美しさとリズムの快樂、

そしてヌリティヤ（表現舞踊）のもつ人間讃歌と靈的な没入感をみなさんは知ったこととなります。

アビナヤ／Abhinaya／अभिनय

abhinaya という語の由緒はサンスクリットの abhi と ni にあります。

abhi は「向かう／～の方へ」、ni は「運ぶ／導く」という意味です。観客をある方向に導くことを指します。

アビナヤの目的は、観客を「ラサ（Rasa）」と呼ばれる美的体験に導くことにあります。

ラサとは、インドの藝術理論の古典「ナーティヤ・シャーストラ」で論じられる、究極的な美的価値です。

細かいところは中級・上級篇で取り上げますので、現時点ではそういうものがあるということだけ、ご理解ください。

舞踊に限らない、あるゆる藝術表現の目的は観客の精神に「ラサ（Rasa）」を生じさせる、

あるいはそのような状態に昇華させることにある。それが「ナーティヤ・シャーストラ」の説くところです。

※ご関心のある方は弊HP「研究」内の「インド舞踊理論物語」及び「用語集」をご参照ください。このあたりの概念について触れています。

アビナヤというのは観客を「ラサに導くための技法」のことを指します。以下の4種類があります。

- ・アングカ (Aangika) : 四肢を用いた表現。
- ・ヴァーチカ (Vaachika) : 言葉による表現。詩、歌、劇など。
- ・アーハーリヤ (Aaharya) : 装飾による表現。化粧、衣装、宝石など。
- ・サートヴィカ (Saatwika) : 思想による表現。内面の感情が身体に表れたもの。

さて、初級 I の理論篇で以下のように書きました。

インド舞踊には踊りをその性質によってふたつにわけ、二項対立的に把握する伝統があります。ヌリッタとヌリティアです。ヌリッタは、意味のないリズムとかたちによるダンスです。カタックの特徴はヌリッタが抜群に発達したことです。ヌリティアは、感情や出来事や物語舞踊を表現します。表現の技法のことをアビナヤ (Abhinaya) といいます。

ここに「アビナヤ」は登場済みでした。アビナヤはヌリティアに関係する概念であり、ヌリッタには関係がありません。

というか、理論的には、アビナヤを用いない表現をヌリッタと呼ぶのです。

とはいえ、これも初級 I で述べたとおり、完全に純粋なヌリッタやヌリティアというのはありませんので、アビナヤは常に重要なものです。

では、実践レベルでどういう言葉の使い方がなされるかというと、

「彼女はアビナヤが得意だ」 = 表情をつくるのが上手だ。眉を動かせたり、ムドラを綺麗につくれたりする。

「この振りのアビナヤはむづかしい」 = パントマイムを上手にしないとサマにならない、自分を様々なキャラクター、精神状態に変化させないといけない。

「一箇所アビナヤがうまく出来なかった」 = 踊っているときに、例えばどこか表情や視線の置き所をミスした、など。

アビナヤはたいへんむづかしいものです。特に表情をうまくつくるのは日本人ほどシャイでないとされるインド人でもけっこう恥づかしがります。

そしてそうとう上手でなければ、どこかぎこちない感じが残ります。容姿が重要になってしまうのも残酷なところでもあります。

なので場合によっては容姿のコンプレックスが刺激されてイヤになってしまうひともあるでしょう。

そういうひとはアビナヤのうち、表情づくりについてはあまり考えなくてよい、というのがわたしの考えです。穏かに微笑んでいるくらいでよいと思います。

ひとつ心理的なブロックを解除する方法があるとすれば、「これは神への捧げものなのだ、神だけに見せているのだ」というふうに考えてみてはどうでしょうか。

ひとに見せているのではないと想定してみるのです。実際、インド舞踊はそういうものでもあるわけです。

カタックの三つの流派について

カタックには主要な三つの流派があります。（流派をヒンディー語で「ガラナ（Gharana）」と言います）
勢力の大きい順に「ラクナウ派」「ジャイプール派」「バラナシ派」です。いずれも地名から取られています。
流派といっても相互に排他的なものではなく、ひとりのひとがどちらも学ぶのはよくあることです。こっちをやったらあっちをやったらダメということはまったくありません。

早い話が、わたしのグル、ヌータン先生はラクナウ派とジャイプール派の両方を学んだ方なので、わたしも両方学んでいます。これは珍しいことではありません。
流派とか派閥とか家元とかに過剰に関心をもつと、「権威主義的な面」や「身分制好き面」が出てきてしまいますから、あまり気にしないのがよいでしょう。

あくまで傾向的な特徴として言われるのを教科書的に書いておくと、
ラクナウ派は優雅で繊細な表現を重んじる。ジャイプール派は力強く、躍動的な動きが特徴である。バラナシ派は特にヴィシュヌ派の宗教的演目が豊かである。
くらいになるかと思えます。

なお弊HPの「カタックについて」の冒頭に紹介したラジェンドラ・ガンガニ氏はジャイプール派です。
クムディニ・ラキア氏はいろんな流派を学び自分のスタイル（カダム派）をつくったひと、という扱いです。ほかはみんなラクナウ派です。

「日本のカタック史」で紹介した日本人ダンサーはみなラクナウ派（のはず）です。
前田あつこさんはクムディニ・ラキア氏の弟子ですが、ラクナウ派を自称されています。「東京ガラナ」を打ち出してもおられます。
こういうふうに、流派というのはけっこう自由なものです。

3足単位のフットワーク=タキタ/Takita/तकिट

タタカールの基礎は入門篇で学んだ4足単位のサイクル（=RLRL LRLR）ですが、
3の倍数拍のリズムパタンがしばしば登場し、そういう場合に足のほうも3足を単位として循環させます。
その場合のボルはタキタ/Takita/तकिट、足運びは「右平、左踵、右踵 左平、右踵、左踵」です。

これをティーンタールで練習します。ティーンタールは4拍×4ブロックで循環し、足は3足×2ブロックで循環します。
したがって、16と6の最小公倍数である48で周期がそろふこととなります。すなわち3アバルタンです。

ヴィラムビット・ラヤで、	1グンで3アバルタン
1グン（=1分割=4分音符）	2グンで3アバルタン
2グン（=2分割=8分音符）	4グンで2アバルタンを行い
4グン（=4分割=16分音符）	3アバルタン目の第5マトラ（=右平）からティハイです。
を行います。	Takita Takita Takita Takita Taa 1 × 3

以上、言葉で説明するとたいへんややこしいですが、実際にからだを動かしてみればそこまで複雑ではありません。

4拍刻みと3拍刻みが同時にすすんでいる、異なるリズム周期を同時に体感する。そのような訓練です。

Tat Tat Thun Thunシリーズ 5 Tukre

Teental Madhya Laya

1

Tat Tat Thun Thun Tigdha digdig Thai × 2
Tigdha digdig Thai Tigdha digdig Thai Taa Thai
Tat Tat Thai × 3

2

Taa Thai Taa Thai Tata Thai
Aa Thai Aa Thai Tata Thai
Thai Ta Thai Ta Thai Thai Thai Tat Tat gap
Tat Tat Tigdha digdig
Taa Thai s Taa Thai s Taa Thai

3

Taa Thai Taa Thai Taa Thai Taa Thai Tata Thai
Aa Thai Aa Thai Aa Thai Aa Thai Tata Thai
Thai Ta Thai Ta Thai Thai Thai Tat Tat
Taa Thai Thai Taa Thai Thai Taa Thai Thai Ta Thai × 3

4

Tat Tat Thai Tigdha digdig Thai Taa Thai Taa Thai yii
Tat Tat Thai Tigdha digdig Thai
Tat Tat Thai Tigdha digdig Thai Taa Thai Taa Thai yii
Tat Tat Thai Tigdha digdig Thai
Thai Ta Thai Ta Thai Thai Thai Tat Tat Tigdha digdig Thai
Taa Thai Taa Thai Taa Thai yii
Thai Ta Thai Ta Thai

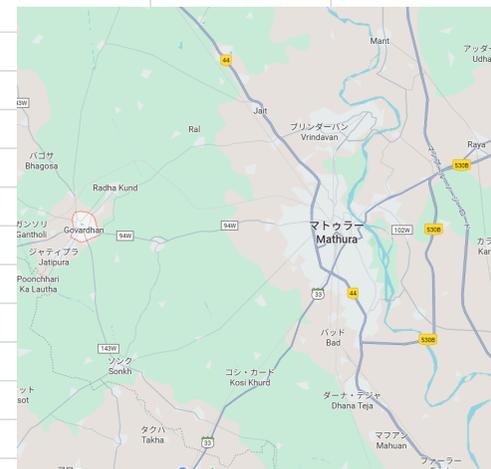
5

Tat Tat Ta~ Tat Tat Tigdha digdig Tigdha digdig
Tat Tat Ta~ Tat Tat Thai ya Thai ya Kran
Tat Tat Ta~ Tat Tat
Tigdha digdig Thai Thai
Tigdha digdig Thai Thai
Tigdha digdig Thai Thai

カヴィッタ / Kavitta / कवित्त)

カヴィッタは「詩」という意味で、詩で歌われる出来事や感情を表現する、ヌリティヤの代表的な演目です。中世インドに神への専心を眼目とする「バクティ」という思想運動が起こりました。バクティは神秘主義者のみならず詩人や芸術家によっても担われ、さまざまな作品の主題となりました。カタックはバクティの詩人が書いた短詩を取り入れ、これにリズムと振りをつけました。それがカヴィッタです。多くの場合、クリシュナに対する熱烈な愛が歌われます（シヴァやガネーシャもあります）。カヴィッタは基本的にドウルッタ・ラヤで踊られ、またティハイで終了します。カタックにおいてもっとも魅力的な演目のひとつと言って過言でないでしょう。ここではクリシュナを主題にしたカヴィッタをふたつ学びます。

北インド
ニューデリーの南140km



どちらもブラジュ・バーシャー語 (Braj Bhasha) という言葉です。クリシュナの生地とされるマトゥラーがあるブラジ地方の言語です。ブラジというのは地域の名前、マトゥラーはクリシュナの生地、ヴリダーバンは幼少期から青年期を過ごした場所。

1 Hathon se hatheli baaje

Hathon se hatheli baaje	ハートン セ ハテリ バジエ	手を叩いて音が鳴る
Paanv se padam chan	パヴァ セ パダム チャン	足を踏んでも音が鳴る
Muh se mruchang baaje	ムハ セ ムルチャンガ バジエ	ムルチャン (口琴) を吹いて音が鳴る
Ghungghru gham kaiya	グングル ガマ カエヤ	グングルの鈴も響く
Pratidin pratidin naprak naprak dhun	プラティディンナ プラティディンナ ナブラカ ナブラカ ド	毎日 ナブラカ ナブラカ ドゥンと愉快地に踊る
Lachak lachak chale kadam ki chaiyya	ラチャカ ラチャカ チャレ カダマ キ チャエヤ	カダムの木陰のように クリシュナは優雅に歩く
Sur shaam sangeet rachat gat	スーラ シャーム サンギータ ラチャタ ガツ	夕暮れ時、クリシュナ (シャーム) が歌い
Bajat mridang	バジャタ ムリダンガ	ムリダンガム (太鼓) が鳴る
Tab nachat (kanaihiya kanaihiya) × 3	タバ ナチャタ (カナヤ カナヤ) × 3	そしてクリシュナ (カナヤ) が踊る

クリシュナが楽器を鳴らしたり、歌ったり、踊ったりする様子を描写しています。音 (拍手・足・楽器) とリズムを通じて「身体そのものが音楽になる」ことを描いている詩です。

クリシュナ神話5 ゴーヴァルダナ山を持ち上げる話

インドラは雨と雷を自在に操る天界の王ですが、傲慢で怒りっぽく、大酒飲みでもありました。

人々は農牧の生活を守るため、雨をもたらす神としてインドラを祭っていました。

ある年、村は豊作となり、村人はナンダを中心にインドラ感謝祭を企てます。

ところが少年クリシュナは「雨を降らせるのはインドラでなく、ゴーヴァルダナ山のおかげだ」と説き、祭りを山に捧げるよう提案しました。

村人は恐れましたが、論理に屈して従います。

これを知ったインドラは激怒し、雲を呼んで七日七晩の豪雨を降らせ、村を洪水に沈めようとした。人々は怯えてクリシュナに助けを求めます。

クリシュナはゴーヴァルダナ山を左の小指で持ち上げ、傘のようにして村人と家畜を守りました。

村人が棒で支えようとする折れてしまいましたが、クリシュナは微笑みつつ持ち続けました。

その力を見て、インドラはついにクリシュナがヴィシュヌの化身であると悟ります。

五頭の象アイラーヴァタに乗り、地上に降りて謝罪しました。

クリシュナはこれを赦し、村人は神とともにある喜びに満たされて帰途につきました。

インドラというのは西方から侵入してきたアーリヤ人の宗教であるバラモン教（ヒンドゥー文化の原型）の聖典ヴェーダではいちばん強い神様です。

これに対してクリシュナは土着民のおそらくは英雄が、神格化された神です。

簡単に言うとインドラよりクリシュナのほうが偉いということを言っています。

バラモン教と土着の宗教が融合した経緯を示していると考えられます。

なお、インドラは帝釈天という名の仏教の神として日本でも親しまれています。



ブラフマー ヴィシュヌ シヴァ

グル・ヴァンダナに登場した三神について説明します。

グルは彼らのように偉大である、あるいは、グルの導きによってこれら神々に近づく、あるいは感じる、一体化する。そういうことがグル・ヴァンダでは歌われていました。

さて、ブラフマーとヴィシュヌとシヴァはそれぞれ強力な神です。ポイントとしては、三神みな最高神であるということです。

それぞれが造物主であり、宇宙の主宰者である。

ブラフマーは宇宙の根源的力、最高原理であるブラフマン（梵）という哲学概念を人格化したものです。梵天です。
宇宙は原初において「ブラフマーの卵」と呼ばれる状態だったそうです。ブラフマーはその宇宙卵を割って天と地を創ったそうです。そうするとブラフマーが造物主です。

しかしそのブラフマーは巨大な蛇の上で昼寝をしているヴィシュヌの臍から出た蓮の花から誕生したという神話があります。
そうなるならブラフマーよりヴィシュヌのほうが先に存在しているのですから、ヴィシュヌが造物主です。

さらには「カタックについて」で述べたことですが、シヴァの一形態である舞踊神ナタラージャが踊りながら世界を創ったという話もあります。
このように造物主や最高神が複数いるのは論理的にはおかしい。そこで三神みんな最高神として扱い、実はひとつなんだという「三神一体（トリムルティ）説」が登場します。
これによれば、ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァの三神はそれぞれ、創造、維持、破壊を象徴し、その無限の循環が宇宙なのであるということになっています。

一神教と多神教の要素をともに信仰体系のなかに保持しておきたいという欲望が、インドのひとびとのうちにあるのでしょうか。
ほとんど收拾がつかないほどに多様であり、にもかかわらず「ひとつ」という感覚をもちつづけるインドの、まことに興味深い性格がここに現れている気がします。

以下、三神にまつわる基本的な事柄、風貌、シンボルの特徴を記します。

ブラフマー



ブラフマーは四つの顔をもちます。
それぞれ宇宙の四方を向いており、彼が宇宙全体を掌握していることを示します。
また、四つのヴェーダ（聖典）を象徴するとも言われます。
髭を生やした賢者の風貌で描かれます。

手に持っているのは
1, 知識と知恵の象徴であるヴェーダ
2, 瞑想と時間の象徴である数珠（マラー）
3, 創造の源である水を入れる水壺
左の絵には水壺は描かれていませんが、そういうこともあります。

純粹さの象徴である蓮の花の上で瞑想します。
妻は学藝の神であるサラスワティです。

ブラフマーはそもそもが哲学概念のブラフマンであるため、民衆の信仰の対象としては、
ヴィシュヌ、シヴァほどの人気を得てはいません。ただブラフマンという概念はインド思想・哲学の
核とも言える概念なので、グル・ヴァンダナのような詩には登場するのです。

ヴィシュヌ



ヴィシュヌは宇宙を維持し、秩序と調和を保つ神です。
青黒い肌を持ち、穏やかで優美な青年神として描かれます。

ヴェーダにすでに登場し、全宇宙を3歩で闊歩したのだそうです。
すなわち万物は彼の3歩のうちに存在します。

大蛇シェーシャの上で眠り、巨鳥ガルダに乗って移動します。
妻は幸運と美の神、ラクシュミー。ラクシュミーは仏教の吉祥天女です。

手に持っているものが重要です。

- 1, スダルシャン・チャクラ（円盤） - 時間の円環を象徴。武器。
- 2, シャンカ（螺貝） - 神聖音「オーム」を象徴
- 3, ガダー（棍棒） - カと正義を象徴。武器。

重要なのは化身（アヴァターラ）というシステムです。

ヴィシュヌはさまざまな民間信仰の神をその「化身」として
自身の神話体系に取り込みました。十の化身として有名ですが、重要なのは

- 1, ラーマ - 「ラーマヤナ」の主人公
- 2, クリシュナ - 「ヴァガバッド・ギーター」の主人公、最も人気がある神様。
- 3, ブッダ - ゴータマ・シッダールタ、仏教の開祖。

です。



シヴァ



シヴァもさまざまな神話的背景をもち、それらを象徴する造形をもちます。
ヴィシュヌと同様に、いろいろな民間信仰を吸収して、複雑なシヴァの意匠が出来たものと思われます。
しつこいようですが、このように、どんどん吸収して、あれこれ一緒にして、「これもこれも同じだ」で納得するのが、インド的思惟の特徴と思われます。

シヴァはヒマラヤ山中で苦行をしていたので、瞑想の神として有名です。左上がその図で、結跏趺坐の姿がよく描かれます。右上のブロンズ像は「ナタラージャ」という舞踊の神の姿で、踊りながら世界を創造したことになっています。
妻はヒマラヤの娘のパールヴァティーです。
このパールヴァティーはその狂暴の姿であるカーリーのほうが有名です。

シヴァとパールヴァティーの子供が軍神スカンダ（韋駄天）と象面のガネーシャ（歓喜天）です。
シヴァはたくさんの異名をもち、それぞれが異なる性質を象徴しています。
ハラ（破壊する者）、シャンカラ（吉祥をもたらす者）、
マハーデーヴァ（偉大な神）、マヘーシュワラ（偉大な王）などです。

ニーラカンタ（青い首）という呼び名もあります。
これは太鼓の乳海攪拌の際に猛毒が誕生してしまい、世界を救うためにそれを飲みこんだ結果、首が青くなったのだそうです。

シヴァの意匠は多彩です。
天上から降下するガンジス川を頭頂で支え、神を荒々しく結び上げ、頭に三日月を戴きます。
額の第三の目から炎を放出して悪を焼き尽くします。
手には三叉の戟（トリシューラ）をもち、その一刃がそれぞれ創造、維持、破壊を象徴しています。
また太鼓（ダマル）は宇宙のリズム、生命の拍動を象徴します。

ヴィシュヌもシヴァもともに最高神で、あらゆる属性を総合的にもつ神ではありますが、あえて図式的に理解するならば、ヴィシュヌが安定と調和、優雅、女性であり、シヴァは変化と躍動、力強さ、男性的。というようにざっくりと理解してもよいでしょう。